

四 他方の啓示は到る處にあり

然り、自然界には、實に一貫せる道理が籠つてある。眞に佛心の顯現たること疑ない。看よ。太陽は毎日く必ず東の空から登つて、毎晩く西の空に入る。誠に行儀作法の正しい姿である。夏になれば夏のやうに、冬になれば冬のやうに、照すべきを照し、煖むべきを煖むるまでのことで、決して無駄な餘計な事をしない。是は大に世人の學ぶべきことである。遂に一度も太陽が不行儀にも朝寝をしたとか、晝寝をしたとか云ふことはない。又遂に一度も太陽が夜中に照り出したとか、冬の最中に三伏の熱を越したとか云ふことはない。

花は年々紅に咲き、柳は歳々緑に芽を出す、咲くべき時が來れば、深山幽谷の岩の端狭間にも咲く。散るべき時が來なければ、如何に九重の大奥庭に一枝を焚いて酒を温めやうと思つても、決して散らない。誠に行儀のよい姿である。今年の梅の花は贅澤にも六輪に咲いたとか。近頃の紅葉は生意氣になつて、紫色にもなれば金銀の色も交るといふやうなことはない。誠に我等への活教訓である。

盡日尋春不見春 芒鞋踏遍隴頭雲

歸來笑撚梅花嗅 春在枝頭已十分

是れはこれ、羅太經が『鶴林玉露』に、悟道といふ尼僧の詩として録するもの。何でも春が見たい、春といふものに逢ひたいと、辨當持で、日がな一日中、野越え山越え、里踏んで春を尋ねたが、尋ねてもく、まだ残んの雪はところぐくに白く、膚には餘寒の風つめたたくして、春らしい氣色も見えぬ。

ヤレ埒もない、疲れ果て、落膽して我家に歸り、軒端に一二輪ほころびそめた、梅花を撚つて嗅げば、春の氣分は已にこのうちに溢れてある。遠く家を

出で、求むるには及ばなかつた。我軒近く春は早や満ちてあつた。

道を求むる者は、この詩に例して大に悟るところがあらねばならぬ。自己を忘れて、理論の山にゆき、文字の野に出で、道は決して探り得ることは出来ぬ。ちかく自己を掘れ、現在只今の自己生活に徹せよ。こゝに大道悠悠春の如くに存し、光々火の如く輝くものがあります。

春眠不覺曉 處々聞鳥啼 夜來風雨聲 花落知多少

ぼかく煖めらるゝ光に、煖められては、目覺めずに居られぬ如く、光は既に我内心に滿つ。出で、見よ、御恩に夜は明けたりな。

「慈光はるかにかふらしめ、光のいたるところには、法喜を得とぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ」

かつて、狂歌師なる元の木阿彌が、江戸の麻布邊を逍遙した時、とある稻荷神社の神木に、人の兩眼を書いた紙を貼り、釘を以て兩眼を打ち付けたのを見て、無理な祈願をこめて、人を呪ふ奴があると思ひ、矢立とり出して、直に狂歌一首をその側に書付けた。

目をかいて祈らば鼻の穴二つ、耳でなければ聞くことはなし

翌日、木阿彌が行つてみると、昨夜深更、祈願主が来て見たのか、今度は大きな耳を書いて、神木に釘づけにしてある。これでもきかぬかと云ふ意氣込。成程、目では聞けまいが、耳では聞かぬ譯に參るまいと。再び筆をとつた木阿彌、

目を耳にかへすくも打つ釘は、つんぼう程もなほきかぬなり

と認めて置いた。いくら耳かとして、迂かりして居ては聞えぬのに、況んや聾者と云ふことがある。これでは云何もならぬ。今夜は云何するかと、翌日行つて見れば、こは如何に。やつたもやつた。大きな藁人形に釘一杯打ち込ん

で、頭あたまから足あしまで釘くぎづめた。木阿彌もくあみ、につこり笑わらつて書かいた一首しゆ

稲荷山いなりやまきかぬ祈いのりに打うつ釘くぎは、ぬかにゆかりの藁わらの人形にんぎやう

いくら釘打くぎうつても應こたへないのが糠ぬかに釘くぎ。糠ぬかの先祖せんぞの藁わらの人形にんぎやうも、駄目だめだと教をしへられて、これきり呪のろひも止やめたとある。

斯様かやうな、我儘勝手わがまゝかっな考かんがへを起おこして、人ひとを呪のろひ、世よを恨うらみ、折角せつかくの佛心ぶつしんを無む

にしてはならぬ。人生じんせいに徹底てつていせよ。